

# 『和字絵入 往生要集』「大焦熱地獄」の解釈史的研究

—絵師八田華堂金彦の解釈—

西 田 直 樹\*

## 概 要

天保14年（1843年）に刊行された『和字絵入 往生要集』は、所謂「後期仮名書き絵入り往生要集」に属する本である。本研究において取り上げる第12図「大焦熱地獄」は元版本（寛文11年本〔1671〕）の挿絵とは大きく異なる場面を描いている。この第12図の分析を通して、江戸時代後期（天保年間）に生きた絵師八田華堂金彦の『往生要集』「大焦熱地獄」の解釈を歴史的視点から探った。

## キーワード

- ・ 仮名書き絵入り往生要集 ・ 八田華堂金彦 ・ 『和字絵入 往生要集』挿絵
- ・ 大焦熱地獄 ・ 解釈史

## 1 はじめに

文学作品を考える場合、特に文学研究において、「挿絵」というものは「詞章」（本文）よりも下位に位置付けられることが多い。「作品」とは、あくまでも「詞章」を書いた作者のものであり、たとえ初出の段階で挿絵が添えられていても、文学全集などに収録される場合は「詞章」のみが採録される場合が多いのが現状である。「挿絵」は「詞章を補助するもの」と考えがちである。しかし、「読書」という行為を考えた場合、読者は、抽象的な「言語」によって書かれた「作品」を抽象的なまま理解することなどあり得ないはずである。読者は、自らの知識や経験に基づいて、作品の具体的なイメージを頭の中に作り上げながら読書を行っている。この読者の頭の中で作り上げられる作品のイメージに、「挿絵」は大きな影響を与えるのである。文学研究において、「作者」（作家）と「挿絵師」（挿絵画家）は別個の存在として捉えられるのが普通である。しかしながら、作品の文化的影響などを広く研究する場合には、「詞章」と「挿絵」を分けて考えることが正しい作品理解へとつながるのか、私は大いに疑問を持っている。

日本において印刷による本の出版が盛んになるのは江戸時代に入ってからである。一枚

---

\*作新学院大学人間文化学部 助教授

の版本に文字や絵を彫りつけて印刷する版本が盛んに売られるようになった。冊子形態の文学作品を読むという行為が、一部の教養のある階層の特権的なものではなくなったのである。江戸時代に出版された本の中には『平家物語』や『徒然草』など、江戸時代当時においても古典に属する作品が含まれていた。これらの古典の中には挿絵を含む「絵入本」も存在する。これらの「絵入本」は、江戸時代の読者に古典の世界を容易にイメージさせることが出来たことが予想される。このように考える時、(特に「絵入本」の場合には、)冊子形態で読者に提供された「作品」を、「詞章」と「挿絵」とに分別して「詞章」のみを文学研究の対象することには、いささか問題があるように思われる。

マルチメディア[multimedia]というコンピュータ用語がある。文字や図形、音声、画像といった性質の異なるものをデジタル情報としてコンピュータの中で統合的に扱うメディア(媒体)のことである。パーソナルコンピュータが普及した1980年代後半に一般語彙として広く用いられるようになった言葉である。おそらくこのマルチメディアという意識は、1980年代以前の日本人にはなかったものである。

そこであらためて江戸時代の「絵入本」を見れば、それは「文字」(詞章)、「画像」(挿絵)に加えて、詞章を声に出して読むという当時の習慣によって加えられる「音声」と、いう複数の要素が融合した表現物であることに気づく。つまり、江戸時代に出版された「絵入本」は、古典的なマルチメディアと位置づけることができるのである。「詞章」や「挿絵」が個々別々に存在するものではなく、統合された一個(この場合は一冊)の表現物として捉えることが出来るのである。本研究は、江戸時代の「絵入本」を現代人(つまり生活の中でマルチメディアを自然な形で受け入れている日本人)の視点から研究し、文化史上の位置付けを明確化するものである。

## 2 解釈史料としての挿絵

「絵入本」の研究にあたり、私が注目したい一本の『往生要集』の絵入本(『往生要集』の原本は985年に源信によって書かれた仏教書である)がある。天保14年(1843年)に刊行された『和字絵入 往生要集』である。本書は、寛文11年刊『ゑ入 往生要集』を元版とする再刻本で、3巻3冊で「地獄物語」「六道物語」「極楽物語」という副題を持つ、所謂「後期仮名書き絵入り往生要集」に属する本である。この天保14年本は、初めて挿絵を描いた絵師の名(八田華堂金彦)が刊記に明示されている点で、「仮名書き絵入り往生要集」諸本の歴史の中で重要な意味を持つ一本と言える。それ以前の「仮名書き絵入り往生要集」には、挿絵を描いた絵師の名が明らかにされることはなかった。『往生要集』は江戸時代において既に古典的権威を持つ仏教書であったため、著者である源信と同等に絵師の名を明示することは控えられていたのであろう。つまり「詞章」と「挿絵」とでは、圧

倒的に「詞章」に重きを置いた編集がなされていたのである。それに対して、天保14年本は、これまでになく「挿絵」に重きをおいた「仮名書き絵入り往生要集」であったと言えるのである。

一般に「挿絵」は、「詞章」を補助する役目と考えられがちであるが、本というメディア（媒体）における「挿絵」の役割は、決して軽いものではないと私は考えている。「挿絵」は、ある特定の場面を強調し、読み手に強い印象を与える効果を持っている。またストーリーの中に登場する人物などの具体的なイメージを読み手の意識の中に一瞬のうちに構築することができるのである。このような「挿絵」の機能は、「詞章」の作者がいかに技巧をつくして「詞章」を書いたとしても言語という抽象的なものを使って表現するかぎり、「挿絵」を超えるほどの伝達力は持ち得ないものである。「挿絵」は（その可否は別として）読者の作品解釈に多大な影響を及ぼすのである。

天保14年本は寛文11年本の再刻本である。元版本と再刻本の間で「挿絵」を対照すると、大きな違いのあることに気付く。つまり「挿絵」を描いた八田華堂金彦が単純に元版本の「挿絵」を写し取ってはいないのである<sup>注1)</sup>。中には八田華堂金彦が自ら「詞章」を読み、解釈して「挿絵」を描いたものもある。本研究において取り上げる第12図「大焦熱地獄」もその一つである。元版本の挿絵とは大きく異なる場面を描いているこの第12図の分析を通して、江戸時代後期（天保年間）に生きた絵師八田華堂金彦の『往生要集』「大焦熱地獄」の解釈を歴史的探ることは出来ないだろうか。天保本の挿絵を『往生要集』の解釈史料と位置づけて研究を行ってみたい。

### 3 研究の方法

八田華堂金彦の『往生要集』「大焦熱地獄」の解釈を解明するにあたり、私は次に示すAからDの方法を用いた。

A：天保本「大焦熱地獄」の詞章と漢文詞章（最明寺本）の対応部分との対照

研究の第一段階として必要なことは、天保本「大焦熱地獄」の詞章の分析である。民衆教化を目的として制作された「仮名書き絵入り往生要集」の詞章は、漢文の『往生要集』の詞章を単純に書き下したものではない。一部には当時の説教の影響を受けて、『論語』『孟子』や釈教歌などが譬喩として挿入されている箇所もある。八田華堂金彦は挿絵を描くにあたり、「仮名書き絵入り往生要集」の詞章を熟読していることは、これまでの私の研究によって明らかとなっている<sup>注2)</sup>。八田華堂金彦の描いた挿絵から『往生要集』「大焦熱地獄」の解釈を読み取るにあたっては、彼が描いた挿絵を『往生要集』の詞章（漢文詞章と同内容）に従って描いた部分と「仮名書き絵入り往生要集」独自の

詞章（漢文詞章にはない部分）に従って描いた部分を明確に分けておく必要がある。八田華堂金彦は天保本の挿絵を描くにあたり、滋賀坂本にある聖衆来迎寺蔵『六道絵』をはじめ何点かの仏画を参考といている。天保本の挿絵の成立過程は少々複雑な面がある。そのためにも、八田華堂金彦が挿絵を描いた天保本の詞章の分析をおこない、漢文の『往生要集』の詞章との内容的な差異の有無を確認しておく必要があるのである。天保本と漢文詞章の対照作業は、拙著『「往生要集絵巻」詞章と絵の研究』で用いた詞章整理番号に従って行った。<sup>注3)</sup>

その結果、天保本「大焦熱地獄」の詞章には、「其声如雷吼」（詞章整理番号258）の5文字分が欠落していることが確認できた。それ以外には「閻羅人」を「獄卒」とするなど漢語（仏教語）の置き換えや、短い補足の詞章はあるものの、『論語』の譬喩等の長文挿入部分は無いことが分かった。つまり、天保本「大焦熱地獄」の詞章は、漢文の『往生要集』をはじめとする諸本の詞章と内容的には、ほぼ同じものであることが確認できたのである。

#### B：天保本「大焦熱地獄」と元版本詞章（寛文11年本）の対応部分との対照

次に、天保本「大焦熱地獄」の詞章分析として、元版本である寛文11年本の対応部分（大焦熱地獄）との対照を行った。再刻本である天保本の詞章は、寛文11年本の詞章をもとに書かれている。もっとも、江戸時代の出版における元版・再刻は、現代の再版とは異なり、詞章を一字一句違わずに写すという訳ではない。たとえ同じ内容の詞章であっても文字表記などに違いが生じることもある。

八田華堂金彦が『往生要集』「大焦熱地獄」をどのように解釈したか、それを彼が描いた挿絵から読み取るためには、研究の最終段階において天保本（再刻本）の挿絵と寛文11年本（元版本）の挿絵を対照させ、八田華堂金彦の独自性を浮き彫りにする必要がある。その条件としては寛文11年本と天保本の詞章が同内容であることを確認しておくことが必要である。そこで私は拙著『「往生要集絵巻」詞章と絵の研究』で用いた詞章整理番号にしたがい両本の詞章の対照作業を行った。

対照作業の結果、天保本は、漢字・仮名の用字に違いがあるものの、元版本（寛文11年本）の詞章と同内容であることが確認できた。

#### C：天保本「大焦熱地獄」挿絵の分析及び詞章との対照

次に、八田華堂金彦の描いた「大焦熱地獄」挿絵の分析を行った。八田華堂金彦が、天保本の挿絵を描くにあたり、聖衆来迎寺蔵『六道絵』を手本としたことは前述の通りである。ところが、聖衆来迎寺蔵『六道絵』に描かれているのは、八熱地獄のうち、等活地獄、黒縄地獄、衆合地獄、無間地獄の4つのみである。つまり八田華堂金彦は「大

焦熱地獄」の挿絵を天保本の詞章によって江戸時代的イメージとして描いたこととなる（最後に確認を行うが、八田華堂金彦は元版本の「大焦熱地獄」挿絵の構図を全く受け継いでいない）。

天保本「大焦熱地獄」の挿絵は3場面17の要素から成り立っている。詞章との対照の結果、八田華堂金彦は「大焦熱地獄」の後半部分の内容を集中的に挿絵として描いていることが確認できた。

#### D：天保本「大焦熱地獄」挿絵と元版本挿絵（寛文11年本）「大焦熱地獄」との対照

最後に、八田華堂金彦の描いた「大焦熱地獄」挿絵を元版本の挿絵と対照し分析を行った。天保本「大焦熱地獄」の挿絵と元版本の「大焦熱地獄」の挿絵を対照すれば、両者が大きく異なることは明白である。両者の対比によって、八田華堂金彦が元版本の挿絵の影響を受ける事無く、独自の発想で天保本の挿絵を描いたことを確認することができた。また、元版が「大焦熱地獄」の大地獄のみを挿絵として描いているのに対し、八田華堂金彦は獄卒（閻羅人）が罪人の皮を剥ぐなど残酷な記述のある別所の部分も挿絵として描いている。『往生要集』の詞章を読んだ八田華堂金彦が、「大焦熱地獄」のどの部分に鮮烈な印象を受けたのか。それを元版本の挿絵との比較の中で再度辿ることもできた。

### 4 天保本「大焦熱地獄」の詞章と漢文詞章（最明寺本）の対応部分との対照

はじめに、研究の方法Aで述べた通り、漢文詞章と天保本詞章の対照を行った。その結果、天保本の詞章には、仏教の知識が浅い民衆を対象とするために読み下し文（というよりむしろ訳文といった方が適切であろう）を工夫した箇所が確認できた。それは主として漢文詞章には書かれていない内容を若干加えた「補入」や漢語の置き換えなどであった。つまり、天保本の「大焦熱地獄」の部分では『往生要集』以外の文献や和歌の引用や、大胆な書き換えは行われていなかったのである。

対照作業を行うにあたり、私は下に示した表を使用した。表は左から整理番号、漢文詞章、天保本詞章の順に記入した。

漢文詞章と天保本詞章の対照表

番号	漢文詞章（最明寺本）	天保本詞章（『和字絵入 往生要集』）
249	夫大焦熱地獄者在焦熱下	七つに大せうねつちごくと云は焦熱地ごくの下にあり
250	縦広同前苦相亦同 大論瑜伽論	たてよこ前に同じ苦の相もまた同じ 大ろんゆかりん
251	但前六地獄根本別処一切諸苦十倍具受	ただし前の六つの根本のちごくと又其別処の地獄との一切のもろもろの苦を十そうばいつつおもくうくる也
252	不可具説	つぶさには説べからず
253	其寿	其寿
254	半中劫	半中劫也
255	殺盜淫飲酒妄語邪見竝譴淨戒尼者墮此中	殺生偷盜邪淫妄語邪見ならひに清淨の戒をたもちたる尼を汚したるもの此ちごくにおつる也
256	此惡業人先於中有見大地獄相有閻羅人面有惡狀手足極熱振身怒肱	この惡業の人まづ中有にして大ちごくのありさまをみるに獄卒あり其面のきつさうすさまじく手あし極熱にして身をもとらかし臂をいからかす
257	罪人見之極大慌怖	罪人これをみて大きにおそみ恐る
258	其声如雷吼罪人聞之恐怖更増	是をきいていよいよ怖をのく
259	其手執利刀腹肱甚大如黒雲色眼炎如燈鉤牙利鋒 臂手皆長揺動作勢一切身分皆悉塵起如是種種可畏形狀	その手に利刀をひらめかし腹は大きにして黒雲の色のごとく眼ひかりは火炎の如くまかりたる牙はほこさきのごとくにするどにして臂手みな長く節たちていきほひをなすときはすべて一身あららかにておそろしき事心もきゆる如くなり
260	堅繁罪人咽如是將去過六十八百千由旬地海洲城 在海外邊 復行三十六億由旬漸漸向下十億由旬	罪人をとらへて咽をかたく縛りて引立て六十八百千由旬の地の中海のそこを過さりて又海の外より三十六億由旬を行さりて漸漸に下にむかひて下る事千億由旬也
261	一切風中業風第一	一切の風の中には業の風第一なり
262	如是業風將惡業人去到彼處	かくのごとくに業の風惡業の人をひきみさりてかの処にいたる
263	既到彼已閻魔羅王種種呵責	すでにかしこにゆきつれば閻魔王種種さまざまに呵責し給ふ

264	呵責既已惡業 縛出向地獄	さてその後悪ごうの縄をもつてしばりて引出して地ごくにむかひゆかしむ
265	遠見大焦熱地獄普大炎熱 又聞地獄罪人啼哭之声悲愁恐魄	いまだ遠くより大せうねつちごくのおびたたしく炎もゆるをみて又罪人の啼さけぶ声を聞てかなしみうれひたましゐおそる
266	受無量苦如是無量百千萬億無数年歳聞啼哭声十倍恐魄心驚怖畏	やうやうちかづきて無量の苦をうくるをみるにかくのごとくにして無量百千万億歳を経るといふを聞てはじめ啼さけぶこゑばかりを聞ておそろしきより十そうはいおそろしく玉しゐきゆるごとく心おどろきて怖おののく
267	閻羅人呵責之言汝聞地獄声已如是怖畏何況地獄燒乾薪草	其時ごく卒この罪人を呵責していはく汝ちごくの声なき目にみてさへかくおちおそるるやいかにいはんやちごくにてその身を直にやかれむ事かれたる草薪をやくごとし
268	火燒非是燒惡業乃是燒	但し火のやくはこれ火のやくにはあらず則是惡業のやく也
269	火燒則可滅	火の焼をはすなはち滅つべし
270	業燒不可滅云云	業のやくをはけすべからずといへり
271	如是苦呵嘖已將向地獄有大火聚	かくのごとくねんごろに呵責してさて引ゐてちごくにむかふに大きな火聚あり
272	其聚拳高五百由旬其量寛広二百由旬	其ほむらあかりて高き事五百由旬そのひろさ二百由旬なり
273	炎燃熾盛彼人所作惡業勢力急擲其身墮彼火聚如大山岸推在陰岸 已上正法念經略抄	炎のもゆる事さかんにしてかの人をつくりし処の悪ごうの勢りきか急に其身をなげてかのほむらにおとす事大山の岸よりおして嶮き岸に落すごとし 已上正法念經略抄のころをとる
274	此大焦熱地獄四門之外有十六別処	此大焦熱ちごくの四方の門の外に十六の別所あり
275	処其中一切無間乃至虚空皆悉炎燃無針孔許不炎燃处	其中の一處は炎のもゆる事一切のところあいだなく乃至虚空までももえ悉皆針のみづほども炎のもえざる所なし
276	罪人火中発声唱喚無量億歳常焼不止	罪人共火の中にてうらめしけにこゑをあげ無量億歳ふるとてもとこしなへに焼やまずと唱へさけぶばかり也

277	犯清浄優婆夷之者隨此中	これは清浄潔斎の優婆夷を犯したりしもの此ちごくに落る也
278	復有別處名普受一切苦惱	又一个の別處をば普受一切苦惱とそ名つけける
279	不侵其皮謂炎刀剥割一切身肉既剥其皮与身相連敷在熱地以火燒之	炎の刀をぬきもつて身の皮をのこらず面あし手まではぎさきて身のしむらをばきらすしてその皮を身とつらね熱地のうへにしき置て火をもつてこれを焼
280	以熱鉄沸灌其身體	あるひはわきかへりたる熱てつをそそぎける
281	如是無量億千歳受大苦也	かやうに無量億千億歳大苦惱をうくる也
282	此丘以酒誘僞誑持戒婦女壞其心已然後共行或与財物之香者隨此中	これは出家の戒をみちとしてたもちし女房を酒をもつてたぶらかし其心をよくやぶりとともに淫よくをおこなひ或はたからをあたへしもの此ちごくにおつる也
283	餘如經中說 正法念經略抄	残りの別處は經中にとき玉ふごとくなり 正法念經略抄のこころなり

上の対照表をもとに、整理番号ごとに結果を示せば以下の通りである

- 249：天保本は「夫…」という書き出しを用いず「七つに…」から始まっている。
- 250：天保本は「縦広」（「じゅうこう」「たてひろさ」などよむ）を「たてよこ」と訳している
- 251：天保本は「十倍具受」を「十そうばいつつおもくうくる也」と「おもく」という語を補足して訳している。また「十倍」を「十層倍」とも改めている。
- 255：天保本は、漢文が「殺盜淫」としている部分を「殺生偷盜邪淫」と、略することなく書いている。また「浄戒」を「清浄の戒」、「此中」を「此ちごく」と解説を加えて訳している。
- 256：天保本の「ありさま」は漢文には無い。漢文の「悪状」は「みにくき」などと訳されるのが通例だが、天保本では「すさまじく」と訳している。また「閻羅人」という語をそのままは用いず「獄卒」と訳している。
- 258：天保本には「其声如雷吼」が完全に欠落している。と「更増」の部分は、その直前の詞章が訳されているため、欠落というよりも省略に近いと考えるべきであろう。
- 259：天保本の「ひらめかし」「するどにして」「節たちて」は漢文には無い。また「眼炎如燈」（「まなこのほのをはともしびのごとし」と読むのが通例）を天保本では「眼ひかりは火炎の如く」と訳している。



- 260：天保本は「繁」（「ゆふ」）を「縛りて」、「将」（「ゐて」）を「引立て」、「地海洲城」を「中海のそこ」と訳している。
- 262：漢文の「将」を天保本は「ひきゐ」と訳している。（260と同じ訳し方である。）
- 263：天保本は「到」（「いたり」）を「ゆきつれば」、「閻魔羅王」を「閻魔王」と訳しているほか「さまざまに」という句を補入している。また「閻魔王…呵責し給ふ」というソソケイゴヲ用いて訳をしている。
- 264：天保本は「呵責既已」（「呵責すでにおはりて」）を「さて其の後…」という詞章に訳している。また「出」（いでて）を「引出して」と訳している。
- 265：天保本は「普」（「あまねく」）を「おびただしく」、「啼哭」（「たいこく」「なくこゑ」など）を「啼サケフ声」と訳している。
- 266：天保は「やうやうちかづきて」「（苦をうくるを）みるに」を補入している。また、「十倍」を「十そうばい」、「怖畏」を「おののく」と訳している。
- 267：天保本は「其時」「此罪人」「汝」「目にみてさへ」の語を補入している。また「閻羅人」を「獄卒」、「怖畏」（「おそれおそる」）を「おそるる」と訳している。
- 268：天保本は「但し」を補入している。
- 270：天保本は「云々」を「といへり」と訳している。
- 271：天保本は「已」（「おはりて」）を「さて」と改めている。
- 272：天保本は「量」を訳さず、「其量寛広」という部分を「そのひろさ」と訳している。
- 276：天保本は「罪人」を「罪人共」と複数とし、「うらめしけに」という句を補入している。
- 277：天保本は「潔斎」という語を補入し、「此中」を「此ちごく」と意味を補足して訳している。
- 279：天保本は「のこらず面あし手まで」という詞章を補入し、「相連」を「つらね」と訳している。
- 281：天保本は「如是」（「かくのごとく」）を「かやうに」、「大苦」を「大苦惱」と訳している。
- 282：天保本は「これは」「淫欲」を補入している。また「婦女」を「女房」、「此中」を「此ちごく」と訳している。
- 283：天保本は「如経中説」（「経にとくがごとし」）を「経中にとき玉ふごとなり」と尊敬語を用いて訳している。

以上の調査の結果、天保本の詞章には八田華堂金彦が挿絵として描くほどの独自の詞章の無いことが確認できたのである。

## 5 天保本「大焦熱地獄」と元版本詞章の対応部分の対照

次に天保本の「大焦熱地獄」と元版本である寛文11年本詞章との対照作業を行った。これは、本研究の最終段階において、八田華堂金彦が描いた挿絵の独自性を解明するために必要とされる作業である。もしも天保本と寛文11年本の詞章が内容的に異なっていた場合には、両本の挿絵の単純な比較対照によって八田華堂金彦の描いた挿絵の独自性を論じることが出来ない。反対に、天保本と寛文11年本の詞章が同文であれば、両本の挿絵を要素（部分）ごとに分類対応させることによって、八田華堂金彦が元版本の挿絵からどのような影響を受け、また彼が独自の構想によって描いた部分を抽出することも可能となるのである。

ところで、江戸時代の出版は、現代の活版印刷とは異なり、版木を用いて印刷を行っていた。江戸時代における「再刻」とは、文字通り版木を新たに彫って（起して）印刷を行うものである。従って、現代の「再版」（版を変えることなく印刷を行うこと）とは全く異なった作業を行うものである。再刻には、元版本の各ページを直接版木に貼り付けて版を起すものと、新たに原稿を書いてから版を起すものがある。後者の場合には、用字や行数などにおいて違いが生じることが多い（時には内容が異なる詞章となる場合もある）。天保本と寛文11年本の詞章を比較対照した結果、詞章の内容自体には違いはなかったものの、漢字・仮名の用字において違いを確認することができた。

両本の対照作業を行うにあたり、私は下に示した表を使用した。表は左から整理番号、寛文11年本詞章、天保本詞章の順に記入した。なお、両本において用字の異なる部分は表中の詞章に下線を付けて示した。

寛文11年本詞章と天保本詞章の対照表

	寛文11年本（『急入 往生要集』・元版）	天保本（『和字絵入 往生要集』・再刻）
249	七つに大せうねつちごくといふは焦熱地獄の下にあり	七つに大せうねつちごくと云は焦熱地ごくの下にあり
250	たてよこ <u>まへ</u> におなじ苦の相もまた同じ 大ろんゆかるん	たてよこ <u>前</u> に <u>同</u> じ苦の相もまた同じ 大ろんゆかるん
251	ただし前の六つの根本のちごくと又其別処の地獄との一切のもろもろの苦を十そうばいつつおもくうくる也	ただし前の六つの根本のちごくと又其別処の地獄との一切のもろもろの苦を十そうばいつつおもくうくる也
252	つぶさには説べからず	つぶさには説べからず
253	其寿	其寿
254	半中劫也	半中劫也

255	殺生偷盗邪淫妄語邪見ならひに清浄の戒をたもちたる尼を汚したるもの此ぢごくにおつる也	生偷盗邪淫妄語邪見ならひに清浄の戒をたもちたる尼を汚したるもの此ぢごくにおつる也
256	この悪業の人先中有にして大ぢごくのありさまを見るに獄卒あり其面のきつさうすさまじく手あし極熱にして身をもとらかし臂をいからかす	この悪業の人 <u>まづ</u> 中有にして大ぢごくのありさまを <u>みる</u> に獄卒あり其面のきつさうすさまじく手あし極熱にして身をもとらかし臂をいからかす
257	罪人これをみて大きにおそみ <u>おそ</u> る	罪人これをみて大きにおそみ <u>恐</u> る
258	<u>これ</u> を <u>聞</u> ていよいよ怖をののく	<u>是</u> を <u>き</u> いていよいよ怖をののく
259	その手に利 <u>かたな</u> をひらめかし腹は大きにして黒雲の色のごとく眼ひかりは火焰の <u>ごとく</u> まかりたる牙はほこさきのごとくにするどにして臂手みな長く節たちていきほひをなすときはすべて一身あららかにておそろしき事心もきゆる <u>ごとく</u> なり	その手に利 <u>刀</u> をひらめかし腹は大きにして黒雲の色のごとく眼ひかりは火炎の <u>如く</u> まかりたる牙はほこさきのごとくにするどにして臂手みな長く節たちていきほひをなすときはすべて一身あららかにておそろしき事心もきゆる <u>如く</u> なり
260	罪人をとらへて咽をかたく縛りて引立て六十八百千由旬の地の中海の <u>底</u> を過ぎりて又海の外より三十六億由旬を行さりて漸漸に下にむかひて下る事千億由旬也	罪人をとらへて咽をかたく縛りて引立て六十八百千由旬の地の中海の <u>そこ</u> を過ぎりて又海の外より三十六億由旬を行さりて漸漸に下にむかひて下る事千億由旬也
261	一切の風の中には業の風第一なり	一切の風の中には業の風第一なり
262	かくのごとくに業の風悪業の人をひきゐさりてかの処にいたる	かくのごとくに業の風悪業の人をひきゐさりてかの処にいたる
263	すでにかしこにゆきつれば閻魔王種種さまざまに呵責し給ふ	すでにかしこにゆきつれば閻魔王種種さまざまに呵責し給ふ
264	さて其のち悪業の縄をもつてしばりて引出して地獄にむかひゆかしむ	さて <u>その後悪ごう</u> の縄をもつてしばりて引出して地 <u>ごく</u> にむかひゆかしむ
265	いまだ遠くより大せうねつぢごくのおびたたしく炎もゆるをみて又罪人の啼さけぶ声を聞てかなしみうれひたましゐおそる	いまだ遠くより大せうねつぢごくのおびたたしく炎もゆるをみて又罪人の啼さけぶ声を聞てかなしみうれひたましゐおそる
266	やうやうちかづきて無量の苦をうくるをみるにかくのごとくにして無量百千万億歳を経るといふを聞てはじめ啼さけぶこゑばかりを聞ておそろしきより十そうはいおそろしく玉しゐきゆるごとく心おどろきて怖おののく	やうやうちかづきて無量の苦をうくるをみるにかくのごとくにして無量百千万億歳を経るといふを聞てはじめ啼さけぶこゑばかりを聞ておそろしきより十そうはいおそろしく玉しゐきゆるごとく心おどろきて怖おののく

267	其時ごく <u>そつ</u> 此罪人を呵責していはいく 汝ちごくの声をきき目に <u>見て</u> さへかく おちおそるるやいかにいはんやちごく にてその身を直にやかれむ事かれたる 草薪をやくごとし	其時ごく <u>卒</u> この罪人を呵責していはいく汝 ちごくの声をきき目に <u>みて</u> さへかくおち おそるるやいかにいはんやちごくにてそ の身を直にやかれむ事かれたる草薪をや くごとし
268	但し火のやくはこれ火のやくにはあらず <u>すなはち</u> 是悪業のやくなり	但し火のやくはこれ火のやくにはあらず <u>則是</u> 悪業のやく也
269	火の焼をはすなはち滅つべし	火の焼をはすなはち滅つべし
270	業のやくをはけすべからずといへり	業のやくをはけすべからずといへり
271	かくのごとくねんごろに呵責してさて <u>ひき</u> ゐてちごくにむかふに大きな火 聚有	かくのごとくねんごろに呵責してさて <u>引</u> ゐてちごくにむかふに大きな火聚 <u>あり</u>
272	<u>その</u> ほむらあかりて高き事五百由旬そ のひろさ二百由旬なり	<u>其</u> ほむらあかりて高き事五百由旬そのひ ろさ二百由旬なり
273	炎のもゆる事さかんにしてかの人につ くりし <u>ところ</u> の悪業の勢力か急に其身 をなげてかの火聚におとす事大山の岸 よりおして嶮き岸に <u>おと</u> すごとし。已上 正法念経略抄のころをとる	炎のもゆる事さかんにしてかの人につく りし <u>処</u> の悪 <u>ごう</u> の勢りきか急に其身をな げてかの <u>ほむら</u> におとす事大山の岸より おして嶮き岸に <u>落</u> すごとし 已上正法念経略 抄のころをとる
274	此大焦熱ちごくの四方の門の外に十六 の別所有	此大焦熱ちごくの四方の門の外に十六の 別所 <u>あり</u>
275	<u>その</u> 中の一處は炎のもゆる事一切のと ころあ <u>ひ</u> だなく乃至虚空までももえ悉 皆針のみづほども炎のもえざる所なし	<u>其</u> 中の一處は炎のもゆる事一切のところ あ <u>い</u> だなく乃至虚空までももえ悉皆針の みづほども炎のもえざる所なし
276	罪人共火の中にてうらめしけに <u>声</u> をあ げ無量億歳ふるとてもとこしなへに焼 <u>止</u> ずと唱へさけぶばかりなり	罪人共火の中にてうらめしけに <u>こゑ</u> をあ げ無量億歳ふるとてもとこしなへに焼や まずと唱へさけぶばかり也
277	これは清浄潔斎の優婆夷を犯したりし もの此ちごくに落る也	これは清浄潔斎の優婆夷を犯したりしも の此ちごくに落る也
278	又一つの別處をば普受一切苦悩とそ名 つけける	又一つの別處をば普受一切苦悩とそ名つ けける
279	炎の刀をぬきもつて身の皮をのこらず 面あし手まではぎさきて身のししむら をばきらすしてその皮を身とつらね熱 地のうへに <u>しき</u> をきて火をもつてこれ を焼	炎の刀をぬきもつて身の皮をのこらず面 あし手まではぎさきて身のししむらをば きらすしてその皮を身とつらね熱地のう へに <u>しき</u> 置て火をもつてこれを焼
280	あるひはわきかへりたる熱鉄をそそぎ ける	あるひはわきかへりたる熱 <u>てつ</u> をそそぎ ける

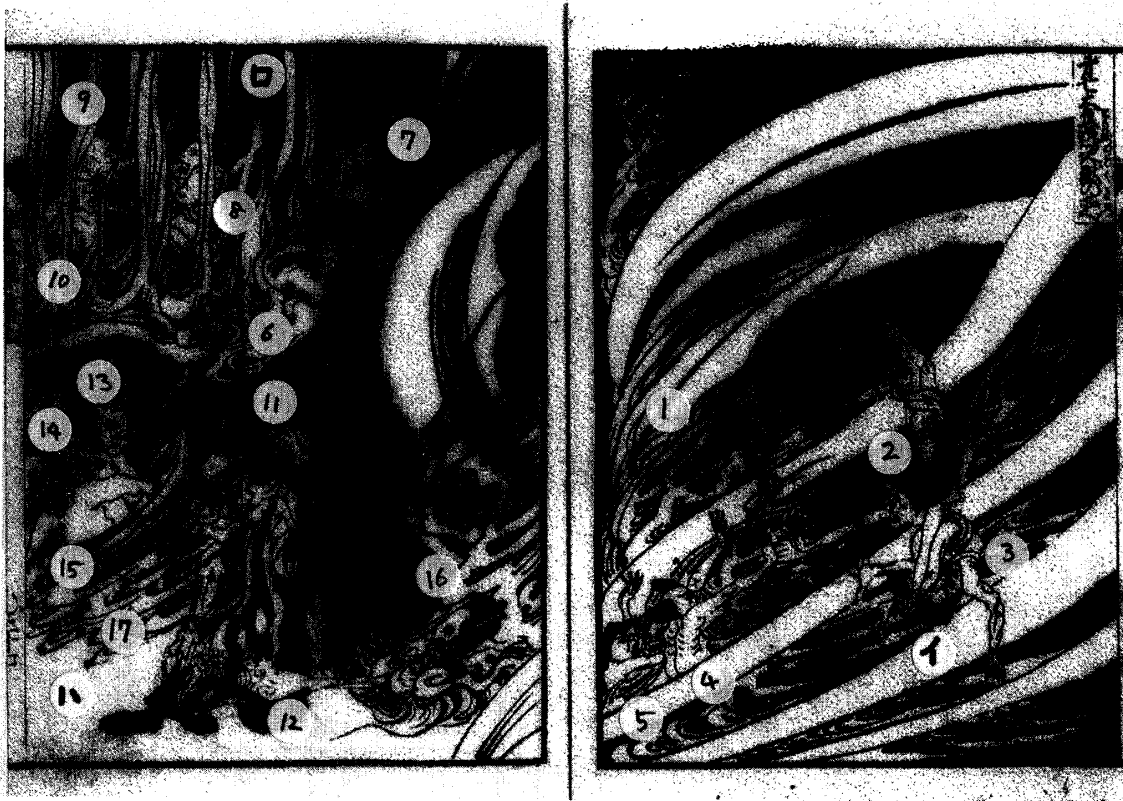
281	かやうに無量億千億歳大苦悩をうくる <u>なり</u>	かやうに無量億千億歳大苦悩をうくる <u>也</u>
282	これは出家の戒をみちとしてたもちし 女房を酒をもつてたぶらかし其心をよく やぶりとともに淫 <u>欲</u> をおこなひ <u>ある</u> ひ はたからをあたへしもの <u>この</u> ちごくに おつる也	これは出家の戒をみちとしてたもちし女 房を酒をもつてたぶらかし其心をよくや ぶりとともに淫 <u>よく</u> をおこなひ <u>或</u> はたから をあたへしもの <u>此</u> ちごくにおつる也
283	<u>の</u> こりの別處は経中にとき給ふごとく なり 正法念経略抄のころなり	<u>残</u> りの別處は経中にとき玉ふごとくなり 正法念経略抄のころなり

なお、漢文詞章との対照作業の中で発見した「其声如雷吼」（詞章整理番号258）の5文字の欠落部分については、元版本の詞章においても欠落していることが確認できた。つまり、天保本は詞章の作成の段階において、元版本である寛文11年本の詞章をそのまま読み取っていると考えられるのである。八田華堂金彦は、天保本の挿絵を描くにあたり、中世の「六道絵」を見るなど周到な準備を重ねているが、詞章を書いた人物は、原典である漢文詞章の『往生要集』を調べるなどの準備はせず、元版本の文章をそのまま使っているのである。

元版本の詞章と再刻本の詞章の対照作業では、内容の一致を確認できたのと同時に、これまで全く関心も持たれることのなかった天保本の編集作業の一端を知ることにも出来たのだと言えよう。

## 6 天保本「大焦熱地獄」挿絵の分析及び詞章との対照

次の八田華堂金彦の描いた「大焦熱地獄」挿絵の分析を行った。挿絵は巻之上26丁ウラから27丁オモテへかけて見開きの大画面で描かれている。26丁ウラ右上の色紙形には「第七大焦熱地獄」という挿絵の題名が書かれている。また、27丁オモテ中ほどにも色紙形があり、ここには「普受一切苦悩」と書かれている。挿絵は3場面17要素からなる。場面と要素ごとの整理番号は以下の図に示す通りである。



天保の挿絵は以下に示す3つの場面から成る。

イ→大焦熱地獄の大地獄

ロ→大焦熱地獄に附属する小地獄。詞章では「其中の一處」と記されているだけで名前は明示されていない。

ハ→大焦熱地獄に附属する小地獄で、普受一切苦悩と名づけられ場所。

このイ・ロ・ハの3つの場面に描かれる①～⑰の要素を場面ごとに分類すると、以下に示す通りである。

イ→①②③④⑤

ロ→⑥⑦⑧⑨⑩

ハ→⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰

次に、天保本挿絵の各要素（①～⑰）の内容を分析した。各要素の内容は以下の通りである。

①火炎A→画面の中央から右側へと渦を巻くように燃え上がる大地獄の火炎（火聚）。

②罪人A→女性の罪人。頭を下にして逆落としに堕ちている。顔に怯えた表情を浮かべている。

③罪人B→男性の罪人。頭を下にし、転がり落ちるように堕ちている。顔に苦痛の表情を浮かべている。

④罪人C→男性の罪人。①の炎の中で焼かれる。両手を体の前方に伸ばし、顔に苦痛の表情を浮かべている。

- ⑤罪人D→①の炎の中で焼かれる。性別は判別できない。④の罪人と同様に両手伸ばし、口を大きく開けて苦痛の表情を浮かべている。
- ⑥火炎B→別所の地獄の炎。⑦⑧⑨⑩の罪人を飲み込んで燃える。
- ⑦罪人E→男性の罪人。⑥の火炎に包まれ、顔だけが見えている。その顔には苦痛の表情を浮かべている。
- ⑧罪人F→男性の罪人。⑥の火炎に焼かれる。両手を上方に広げ、口を大きく開けている。顔には苦痛の表情を浮かべている。
- ⑨罪人G→男性の罪人。⑥の炎に包まれ、顔と手だけが見えている。口を大きく開けて、顔には苦痛の表情を浮かべている。
- ⑩罪人H→男性の罪人。⑥の炎に包まれている。左手を顔にあて、口を大きく開けて泣き声をあげている。
- ⑪獄卒→頭に二本の角を生やし、上半身は裸形。両手首と右足に輪飾を着けている。右足で⑫の罪人の顔を踏みつけて両手でその皮を剥ぎ取っている。
- ⑫罪人→⑪の獄卒によって地面に押さえつけられ皮を剥ぎ取られる罪人。性別は不明。地面に大量の血を流している。
- ⑬罪人の皮A→顔や体の形を残しており、⑰（普受一切苦悩）の炎の中に置かれている。
- ⑭罪人の皮B→顔や体の形を残しており、⑰（普受一切苦悩）の炎の中に置かれている。
- ⑮罪人の皮C→顔や体の形を残しており、⑰（普受一切苦悩）の炎の中に置かれている。
- ⑯罪人の骨→頭蓋骨と肋骨に分かれて、⑰（普受一切苦悩）の炎の中に置かれている。
- ⑰火炎C→別所の普受一切苦悩の炎。⑬⑭⑮の罪人の皮や⑯の罪人の骨を焼いている。

最後に、挿絵の各要素と天保本詞章との対照作業と分析を行った。はじめに挿絵の場面と整理番号を示し、それに対応する詞章を「 」でくくり示した抜き出した詞章の後には「詞章の整理番号」を示した。挿絵の分析は□の中を示した。

#### 場面「イ」－①

「大きな火聚あり其ほむらあかりて高きこと五百由旬そのひろさ二百由旬なり炎のもゆる事さかにして」（詞章整理番号271・272）

大焦熱地獄の火聚は、この挿絵の中で最も強調されている。「高さ五百由旬」「ひろさ二百由旬」という途方もなく巨大な炎を、八田華堂金彦は画面の上下いっばいに描くことで高さ表現し幅は右頁全体から左頁までを使って表現した。この大焦熱地獄大地獄の炎はこの代地獄へ堕ちる以前の中有の段階からすでに罪人の目に見えるほどである。八田華堂金彦は、この大地獄の渦巻く炎を画面の右端（「第七大焦熱地獄の処也」という色紙形のある部分）から描いている。画面右端は、ちょうどこの挿絵を見る場合の入口にあたり、

読み手はまずこの強烈な火聚の印象を強く懷きながら挿絵を左方向へと見て行くこととなる。

場面「イ」－②③

「かの人をつくりし処の悪ごう勢りきか急に其の身をなげてかの火聚におとす事大山の岸よりおして嶮き岸に落すごとし」(詞章整理番号273)

①において大焦熱地獄の火聚を描いた八田華堂金彦は、次にそこへ堕ちて行く男女2人の罪人(②③)を描いた。この部分の『往生要集』(「仮名書き絵入り往生要集」を含む)の詞章では、罪人の性別には触れていない。したがって男女一組の地獄の罪人(亡者)を描いたのは、八田華堂金彦が詞章からイメージを膨らませて描いた(つまり八田華堂金彦独自の『往生要集』解釈によって描いた)ものと考えられる。なお、男女一組の罪人を描くことは室町時代に制作された「熊野観心十界図」において盛んに行われたことである。八田華堂金彦が「熊野観心十界図」(あるいは、それに類する「六道絵」)を見て影響を受けていたことは容易に予想できる。

②の女性の罪人は頭を下に足を上にし、身体を伸ばした形で逆落としに堕ちている。長い髪は逆立っている。このような構図は、「仮名書き絵入り往生要集」の「阿鼻地獄」の挿絵をはじめ、多くの「六道絵」において見ることができる。

③の男性の罪人は坂を転げ落ちるように身体を丸くした姿勢で描かれている。すさまじい速さで転がり落ちる様子が良く描かれている。

場面「ロ」－⑥

「其中の一處は炎のもゆる事一切のところあいだなく乃至虚空までももえ悉皆針のみづほども炎のもえざる所なし」(詞章整理番号275)

⑥の炎は、大地獄の火聚ほど激しい印象は受けない。八田華堂金彦は、大地獄の火炎との描き分けを巧みに行っているのである。

場面「ロ」－⑦⑧⑨⑩

「罪人共火の中にてうらめしけにこゑをあげ無量億歳ふるとてもとこしなへに焼やまずと唱へさけぶばかり也」(詞章整理番号276)

⑦⑧⑨⑩の罪人達は、⑥の炎に包まれている。身体が一番多く描かれている⑧の罪人であっても下半身は炎に包まれほとんど描かれていない。そのような中であって、全ての罪人の顔が克明に描かれている点は注目すべきである。罪人達は口を開き(特に⑧⑨⑩の罪人達は口を大きく開いている)、眉間に等しく苦痛の表情を浮かべているのである。これは、八田華堂金彦が詞章の「うらめしけにこゑをあげ」「唱へさけぶばかり也」という部分を強調しているためである。



場面「ハ」－⑪⑫

「(炎の刀ぬきもつて)身の皮をのこらず面あし手まではぎさきて身のししむらをばきらす」  
(詞章整理番号279)

この部分の詞章は「炎の刀ぬきもつて身の皮をのこらず…」となっているが、⑪の獄卒は刀を持ってはいない。またその周辺にも刀は描かれていない。したがって八田華堂金彦は「炎の刀ぬきもつて」の部分挿絵として全く描いていないのである。その反面、⑫の罪人の体からは大量の血が流れている。獄卒が大力で罪人の皮を剥ぎ、罪人が血を流すというこの描写は、八田華堂金彦が詞章を読み、挿絵のイメージを膨らませる過程で、「当然このような事が起きるであろう」という彼の推測（あるいは経験）が挿絵の描写に付加されていると言えるのではないだろうか。このような八田華堂金彦の制作姿勢は、結果的に罪人が皮を剥がれる時の痛みを読者に容易に予想させるような、迫力のある挿絵を成立したのである。

場面「ハ」－⑬⑭⑮ ⑰

「その皮を（身とつらね）熱地のうへにしき置て火をもつてこれを焼」(詞章整理番号279)

⑬⑭⑮の皮には目鼻口のあとが穴となつて残っている。つまり罪人達は顔の皮まで剥がされていることになる。顔の皮を剥ぐというのは、八田華堂金彦が詞章の解釈から独自の発想で描いた可能性が高い。一般に皮を剥ぐといった場合、背中の皮を中心に剥ぐ（これは動物の皮を剥ぐ場合と同じ）ように描かれるのが普通である。『沙門地獄草紙』の「剥肉地獄」注4）では、罪人達は首の下から太ももの裏側の皮（この場合には肉も含まれる）を剥がされている。顔の部分まで剥がされた皮は、現代人の感覚からすると少々滑稽に思えるが、これは残酷な描写と捉えるべき部分であろう。⑬⑭⑮の皮は⑰の炎によって焼かれる。

場面「ハ」－⑯ ⑰

「かやふに無量億歳千億歳大苦悩をうくる」(詞章整理番号281)

⑯は罪人の骨。⑰はそれを焼く炎である。対応する詞章「無量億歳千億歳大苦悩をうくる」という詞章にもあるように、罪人の身体は焼き尽くされ骨ばかりになっている。罪人が骨となる事は詞章には書かれておらず、ここもまた、八田華堂金彦が詞章の解釈から独自の発想で描いた可能性が高い。

以上、天保本の「大焦熱地獄」挿絵と詞章との対照を行い、その分析を行った。挿絵の画面構成は、大地獄から別所の小地獄へと、詞章の流れに従って右から左上部、左下部と順序良く並べられていた。八田華堂金彦は、詞章から大きく外れた挿絵を描くことはしていないが、既に指摘したように、彼独自の発想（もちろんそれは、あくまで詞章を読んでイ

メージを膨らませたものである)を持って詞章には説かれていない要素を描きこんでいる。そしてそれは結果的に天保本の挿絵を魅力的なものとした。天保本の挿絵は、現在でも永田文昌堂の「仮名書き絵入り往生要集」(絵入りの活字本)の挿絵として用いられ、現在でも版を重ねているのである<sup>註5)</sup>。もしも八田華堂金彦がその独自性を発揮せず、元版本の挿絵を写し取っていたならば、天保本の挿絵は現代まで使われることは無かったであろう。

## 7 天保本「大焦熱地獄」挿絵と元版本挿絵(寛文11年本) 「大焦熱地獄」との対照

次に、天保本「大焦熱地獄」挿絵と元版本挿絵(寛文11年本)「大焦熱地獄」との対照を行った。両者を比較すると、一見して趣きの異なる挿絵であることが分かる。天保本は大胆な黒地に勢いのある炎を描いているのに対し、元版本の挿絵は白地に線描であり、炎の描き方も異なっている。もっとも、このような違いは、元版と再刻の間にある170年という時間を考えれば、当然のことといえよう。



注目すべきは挿絵に描かれた内容である。天保の挿絵には獄卒が一体描かれる以外は10人近い(皮と髑髏をふくめて)罪人の描写によって挿絵が成立している。それに対して元版本の挿絵は、閻魔王や馬頭に獄卒、樹木など描かれているものが多彩である(ある意味でモチーフが整理されていないともいえる)。このような違いがなぜおこるのであろうか。それは両本の挿絵を描いた絵師たちの詞章に対する解釈の違いによるところが大きいのではないだろうか。

そこで、元版本の挿絵について、描かれている要素と挿絵によって表現される詞章の内容に注目しつつ、分析を行った。

挿絵の分析を第一段階として、挿絵を15の要素に分類し、それぞれに①から⑮までの番号付した。

次に、分類した各要素ごとに、挿絵の内容と対応す明らかにして以下に示す表にまとめた。対応する詞章の末尾には、これまでの作業においても用いている整理番号を付した。なお、対応する詞章が存在しない場合には「対応する詞章なし」と記した。

寛文11年本（元版本）挿絵分析の表

番号	挿絵の内容	対応する詞章
①	閻魔王 漢文詞章では「閻魔羅王」となっている。中国風の衣と袴を着け、冠を被っている。左手には矛を持ち、罪人を威圧している。	すでにかしこにゆきつれば閻魔王 種種さまざまに呵責し給ふ (263)
②	獄卒A 両手に鉄棒を持つ。④⑤の罪人たちを睨みつけている。	対応する詞章なし
③	獄卒B 馬頭の獄卒。両手に矛を持ち罪人を追い立てる。④の罪人を刺している。	対応する詞章なし
④	罪人A ③の獄卒に大焦熱地獄の炎に追い込まれる。矛で刺されて血がほとばしっている。	対応する詞章なし
⑤	罪人B 閻魔王や獄卒たちに追われる。	対応する詞章なし
⑥	罪人C ⑦の獄卒に縛られる罪人。	さて其のち悪業の縄をもつてしばりて引出して地獄にむかひゆかしむ (264)
⑦	獄卒C ⑥の罪人を地面に押さえつけ、悪業の縄で縛り付ける。	さて其のち悪業の縄をもつてしばりて引出して地獄にむかひゆかしむ (264)
⑧	罪人D すでに縛られて地面に置かれている。	さて其のち悪業の縄をもつてしばりて引出して地獄にむかひゆかしむ (264)
⑨	罪人E すでに縛られて地面に置かれている。	さて其のち悪業の縄をもつてしばりて引出して地獄にむかひゆかしむ (264)

⑩	罪人 F	大焦熱地獄の炎の中で焼かれる。	炎のもゆる事さかんにしてかの人 のつくりしところの悪業の勢力か 急に其身をなげてかの火聚におと す事大山の岸よりおして嶮き岸に おとすごとし (273)
⑪	罪人 G	大焦熱地獄の炎の中で焼かれる。	炎のもゆる事さかんにしてかの人 のつくりしところの悪業の勢力か 急に其身をなげてかの火聚におと す事大山の岸よりおして嶮き岸に おとすごとし (273)
⑫	罪人 H	大焦熱地獄の炎の中で焼かれる。	炎のもゆる事さかんにしてかの人 のつくりしところの悪業の勢力か 急に其身をなげてかの火聚におと す事大山の岸よりおして嶮き岸に おとすごとし (273)
⑬	樹木 A	松と思われる針葉樹。	対応する詞章なし
⑭	樹木 B	桜と思われる広葉樹。	対応する詞章なし
⑮	炎	大焦熱地獄の炎。	大きな火聚有そのほむらあかり て高き事五百由旬そのひろさ二百 由旬なり (271・272)

分析の結果、元版本の挿絵は、大焦熱地獄の大地獄（詞章の整理番号249～273の範囲）のみを挿絵として描いており、それ以降（詞章の整理番号274～283の範囲）は全く描いていないのである。その一方で、「②獄卒A ③獄卒B ④罪人A ⑤罪人B」で構成される場面と背景として描かれている「⑬⑭」の樹木は、詞章には全く書かれていない要素であった。元版本の挿絵に見られる「大地獄のみを描く」という姿勢は、比較的単純な支障解釈によって元版本の挿絵が描かれたことを物語っているのではないだろうか。その一方で「②③④⑤」「⑬⑭」という、詞章には無いが、「六道絵」や「老いの坂道」などにおいて良く見られる、「罪人を追い立てる獄卒」や「樹木」を加えている。画面全体を見れば、極めて平凡な（しかし、安定感のある）画面となっている。これは、八田華堂金彦の描いた天保本の挿絵が全ての要素において詞章と一致しているのとは大きく異なっている。

八田華堂金彦は、このような元版本の挿絵を否定したのである。八田華堂金彦が天保本の挿絵で最も力を入れて描いている場面は、獄卒が罪人の皮を剥ぎ取る「普受一切苦惱」という小地獄である（詞章整理番号278～282）。特に⑫の罪人が皮を剥がれ、肋骨が露出する描写は力を入れて描かれているし、⑬⑭⑮の皮に罪人の顔（目、鼻、口）の跡が残されている点も、制作段階における八田華堂金彦の工夫の跡が読み取れる部分である。

八田華堂金彦は天保本の詞章を読み（あるいは元版本であった可能性もあるが）、この

罪人の皮を剥ぐという部分に惹かれ、挿絵として描きたいと考えたのであろう。詞章を読めば分かるように、大焦熱地獄は炎の地獄である。したがって、現代人の視点から見れば、その部分の挿絵に皮を剥ぐ責苦を強調する事は、意外なことと思われる。しかしながら、19世紀の挿絵画家である八田華堂金彦はこの「普受一切苦悩」を強調したいと考えたのである。これは現代の我々と八田華堂金彦との『往生要集』の解釈が大きく異なる部分といえるのではないだろうか。

## 8 おわりに

以上、天保本において八田華堂金彦が描いた「大焦熱地獄」の挿絵について元版本の挿絵との比較も含めて分析と評価を行った。

八田華堂金彦は、それまでの「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵のありかたを、踏襲することはなく、多くの部分を独自の発想をもって描いている（それは元版本の挿絵との比較によって明らかである）。それは結果として、江戸時代の後期の日本人が、『往生要集』の詞章のどの部分に惹かれ（つまり負の感動をおぼえ）たのか、という記録史料と位置づけることができるのではないだろうか。

我々現代人は、過去において自分たちの解釈と異なる解釈例を「誤り」あるいは「稚拙な解釈」と考えがちである。しかし、考えてみれば、我々は、その「誤り」と思う解釈によって作り出された文化の上に生きているのである。作品解釈の正誤を論じることは、当然必要であるが、また一方で、解釈の歴史を紐解くことも、文化学研究においては、決して無駄なことではないと私は考えている。

「仮名書き絵入り往生要集」を、『往生要集』の末流本と位置づけるのではなく、『往生要集』の解釈史の史料と考える時、実は、新しい文化学の研究が拓かれることになるのではないだろうか。

（注1）天保14年本（『和字絵入 往生要集』）第15図には「?身」という顔の無い餓鬼が描かれている。これは元版の寛文11年本の挿絵はもとより、他の「六道絵」にも描かれたことの無い餓鬼である。八田華堂金彦は挿絵を描くにあたり自ら詞章を読み解釈して挿絵を描いたことの好例である。

（注2）①『和字絵入 往生要集』第15図「第一餓鬼道の事」の研究（2001年 秋田桂城短期大学『紀要』第10号）②19世紀版行の『往生要集』における修羅道の解釈史的研究（2004年『作新学院人間文化学部紀要』第2号）

（注3）『「往生要集絵巻」詞章と絵の研究』（2000年 和泉書院刊）432ページから704ページ。

(注4) 『沙門地獄草紙』「剥肉地獄」の図(別冊太陽 日本のころ62『地獄百景』1988年平凡社刊 24ページ)



(注5) 昭和6年初版の活字洋装本。挿絵は色紙題の部分を読みやすい文字に改めている。

(注6) 一般に閻魔王は坐像で描かれることが多い。この構図は祖本の『往生要集絵巻』から受け継いだものだが、立ち姿の閻魔王の図は極めてめずらしい。

#### 参考文献

- ・『六道絵』(『日本の美術』271) 宮次男 1988年 至文堂刊
- ・別冊太陽 日本のころ62『地獄百景』1988年 平凡社刊
- ・『六道絵の研究』中野玄三 1989年 淡交社刊
- ・『『往生要集絵巻』詞章と絵の研究』西田直樹 2000年 和泉書院刊
- ・『『仮名書き絵入り往生要集』の成立と展開』 西田直樹 2001年 和泉書院刊